

研究者：大野 晴日（所属：新潟大学歯学部 国際交流サークル）

研究題目：歯学部学生超短期海外派遣プログラムの推進

目 的：

学生主体のサークル活動の一環として国際および地域口腔保健医療に貢献することが目的である。さらに将来の海外留学へのモチベーションを高め、学生一人一人の意識が海外へと向くきっかけを作ること、留学先の問わず世界共通語である英語の使用を通して、コミュニケーション能力を向上させることも期待できる。

これまでの実績から、歯科先進国とされる北欧や北米、そしてアジア諸国など異なる歯科医療・歯科医学の実際、そして歯科学生教育体制を体験・認識することによって、国際医療貢献の重要性に対する意識や学習意欲を向上させるという点で、絶大な効果がある。

また、本大学では同様に海外からの学生の短期の受け入れ、多くの大学院留学生の在籍がある。日本滞在時の積極的な関わりを通し、持続的な意識意欲の向上をめざす。

対象および方法：

対象 新潟大学歯学部学部生（歯学科 1～6 年、口腔福祉学科 1～4 年）

事業活動方式 北米・北欧・アジア諸国の協定締結校歯学部への 2～3 週間程度の派遣による現地歯科事情の見学と医療活動参加

滞在期間 2018 年 8 月、2019 年 2、3 月の 2～3 週間

滞在国内 スウェーデン、スイス（WHO）、アメリカ合衆国、カナダ、ベトナム、タイ、インドネシア、台湾、ミャンマー、ブラジル

結 果：

今年度は北欧が 1 大学と WHO、北米（アメリカ合衆国・カナダ）の 2 大学、ブラジルで 1 大学、東南アジア各地（タイ・インドネシア・台湾・ベトナム、ミャンマー）6 大学の歯学部にそれぞれ 2～6 名ずつ派遣した。参加者は歯学科、口腔生命福祉学科の学生であり、それぞれの立場で各地の歯科医療の実態を学ぶことができた。

現地プログラムにおいて、医療過疎地における歯科医療提供活動への参加、現地歯学部への参加、現地歯学部学生との交流などの経験を通して国際医療貢献の重要性に対する意識が芽生えた。また、直接的に異文化を経験することで人間的にも成長し、現地の歯科治療の現状やそれに対してどのような対策が考えられるのかなど、それぞれが自主的に課題を見つけ、帰国後の報告会にて様々な意見交換が見られた。参加学生は短期留学後も現地学生と SNS 等によって連絡を取り、英語でのコミュニケーション能力が向上している。また本学に来ている多数の交換留学生に対しても、本プログラムによる支援を受けて派遣された学生を中心に、積極的な姿勢で留学生の日々の生活のサポートをしており、本支援の一部をこのような活動に充てることもできた。

考 察：

短期留学で得られる成果は、日本での座学だけでは学ぶことができない、生きた情報の収集と実際のコミュニケーションである。その経験は将来の歯科界を担うために必要不可欠な国際化に対応する教育プログラムにおいて最も重要な位置を占めている。本学部では、大学院学生に対して文部科学省や JSPS の事業による海外エクスターンシッププログラムの提供や若手研究者の計画的かつ組織的な海外派遣を行っている。卒前の歯学部学生に対するこのようなプログラムは、モチベーション向上と北欧・北米やアジアの歯科医療に目を向けるための重要な出発点となっており、卒後の国際化対応教育プログラムに繋がる非常に重要な事業である。

<ミャンマー・ヤンゴン歯科大学>

唇顎口蓋裂チームの手術を見学し、講義を受けたようです。

日本と違うところもちろんたくさんありますが、それ以上に基礎的な治療や診断が世界共通であることを感じる事が多く、驚いたようです。



<アメリカ・UPenn>

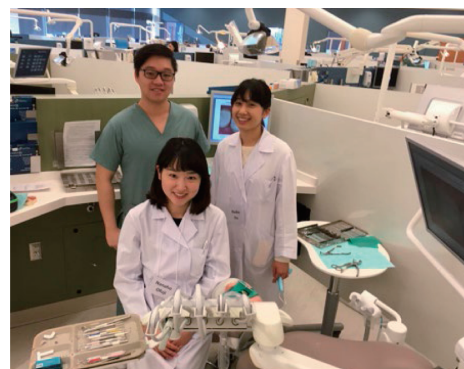
UPenn では卒業に必要な症例経験数が決まっており、彼らは私達よりも遙かに多くの患者さんを診ているようです。

学生の自主性も必要であることを知り、同じく臨床実習を行っている身として非常に刺激を受けたようです。



<カナダ・UBC>

基礎実習では、形成練習などの評価を、ライターからだけではなく、学生が相互で行うこともあるそうです。また、臨床実習では、ライターの介入は新潟大学に比べ非常に少なく、学生が自立して行っています。学生の自主性に刺激を受けたようです。



<タイ・チェンマイ大学>

少子高齢化が進んでいるタイにおいて、「域
歯科保健活動を沢山見学したようです。コ
ミュニティが強く、見習うべきことが多いと
感じたようです。



<台湾・陽明大学>

総合診療では日本のシステムとは異なり、主治医がいらないために毎回異なる先生が診療することでした。そのため、研修医のうちからどんどんと経験を積むことが可能であり手技の獲得がしやすいとのことでした。

<スイス・WHO>

現地の先生方の話を伺うことにより、各国・各地域で活動を進める中で文化や習慣を尊重しながらコミュニケーションをとることの難しさと必要性を痛感したようです。

東日本大震災の際には世界各国から支援を受けていたことを聞き、日本が受けた援助を忘れず、世界全体へ目を向け支援する心の大切さを学ぶことができたようです。



<スウェーデン・マルメ大学>

スウェーデンではインプラント治療を保険内で埋入できることなど、日本との相違点があったようです。学生は午前の診療が終わった後、グループになり自分の症例を紹介し、ディスカッションをする時間があるようで、良い制度だと感じたようです。



<ブラジル・ノヴァファピ大学>

現地の学生は私たちよりも多くの年数、診療を行っています。治療は1人で行うのではなく、2人1組で行います。

小児・障害者そして有病者に対しても学生が処置行っていることが印象的でした。



<ベトナム・ハノイ医科大学>

大学病院には非常に多くの患者が来院しており、多くの症例をこなす先生方がいることに驚いたようです。また、学生は非常に勤勉であり、刺激を受けたようです。



<新潟大学歯学部国際交流サークルの活動風景>

歓迎パーティーの開催や留学生のサポートを、国際交流サークルが自主的に行っています。交流をすることで、日本にしながら海外の歯科事情を学び、さらに英語力の向上に努めています。

